

# 下北半島二枚橋（2）遺跡の土偶・土面について ——縄文晩期末葉の造形——

水沼 和夫<sup>†</sup>

## Dogū und Domen aus der Fundstelle Nimaibashi II in Shimokita-Halbinsel

### — Bildende Kunst am Ende der Endjōmon-Zeit —

Kazuo MIZUNUMA<sup>†</sup>

#### ABSTRACT

Nimaibashi II ist eine Ausgrabungsstelle der Endjōmon-Zeit und liegt an der Nordküste der Shimokita Halbinsel der Aomori Präfektur. Jōmontöpfereien, Steinschwerter, Dogū (Tonstatuen), Domen (Tonmasken) und andere jōmonzeitliche Relikte sind da zahlreich ausgegrabt. Insgesamt 1308 Ausgrabungen davon wurden vom Japanischen Ministerium für Erziehung, Kultur, Sport, Wissenschaft und Technologie im Herbst 2013 als Nationales Wichtiges Kulturgut bestätigt. Die folgende Notize sollte einige von Dogū und Domen aus der Fundstelle Nimaibashi II charakterisieren und nach dem Beweis der sicheren Beziehungen zwischen den Japanern von heute und dem geistigen Leben der Jōmonzeit forschen.

**Key Words:** Jōmonkultur, Dogū, Domen, Kamegaokastil, Schneebrille, Nimaibashi

キーワード：縄文文化、土偶、土面、亀ヶ岡式、遮光器、二枚橋

#### 1. はじめに

二枚橋（2）遺跡は青森県下北半島の津軽海峡沿岸の大畑町（平成17年からは「むつ市大畑町」）の大畑川左岸の標高20～30mの舌状台地に位置する縄文遺跡である。平成8年に町の総合運動公園陸上競技場の造成工事で発見された。翌平成9年からの調査で、最古のものとしては縄文早期の土器片が検出され、本州最北の地における先史の痕跡が改めて確認されるところと

なった。それどころか、縄文晩期後葉の完形の大土偶を含む多数の土偶と、これも完形を含む20個の土面が出土したことで、二枚橋（2）遺跡の名は日本中の専門家や考古学愛好者に知られるところとなった。中でも、20点という土面の出土数は、1遺跡からのものとしては突出しており、今後の詳しい調査研究によって縄文文化観の新たな構築にも資するものと期待される。

平成14年には青森県が出土品中602点を県の「重宝」に指定し、その10年後の平成24年には、土器、石器、木器、骨角器、玉など実に1308点が国の重要文化財に「一括」で指定されている。

その重要性についての評価が、急速に高まっ

平成26年1月8日受付

<sup>†</sup> 感性デザイン学部感性デザイン学科・教授

ていることの証左であろう。

以下の報告は、現在むつ市文化財収蔵庫に収蔵されている「二枚橋（2）遺跡」出土品の中から土偶・土面の良品を中心にそのいくつかを紹介し、その関連事項についての部分的な考察を示したものである。

## 2. 睫毛の〈遮光器型土偶〉

図1に示す大型の完形土偶（高さ25.2cm）は、「遮光器型土偶」として紹介されることが多い。「こういうものも遮光器土偶と呼ばれるのか」という疑問が生じても不思議ではない。理由はいくつかあるが、第一に挙げられるのはいわゆる「遮光器」のスリット、即ち瞼の合わせ目が一般的な遮光器型土偶では水平な一字（完全



図1 二枚橋（2）遺跡の完形大型土偶（高 25.2cm むつ市文化財収蔵庫蔵）

な水平ではなく、両方の眼の外側が幾分下がっている「たれ眼」ものも、その逆の「つり眼」のものもあるが）であるのに対して、二枚橋（2）遺跡のもの場合は瞼の上下に「睫毛」表現が認められ、しかも、その瞼は半ば開かれ

ている（あるいは閉じられつつある）ようにさえ見えるほどに太い彫り取り線で表現されている点である。この睫毛の表現がこの土偶の最大の特徴であり、所謂〈亀ヶ岡式遮光器型土偶〉を見慣れた者に、いわば「浮世絵から竹久夢二への転換」を思わせるようなギャップが、ここにはある。

青森県木造町亀ヶ岡遺跡出土の「シャコちゃん」の愛称で知られる遮光器型土偶（国立博物館所蔵重要文化財）（図2）の場合は、大きく強調された左右の遮光器が顔表面部のほとんどを占め、両眼の接点に穿たれた小さな丸い穴ひと



図2 遮光器型土偶（高 34.2cm 国立博物館蔵）

つで鼻を表現している。肩から胸部、および胴部にかけて亀ヶ岡式特有の雲形紋が施されている。これに対し、二枚橋のものは図1で明らかかなように、両眼が大きく強調されているとはいえ「シャコちゃん」ほどではなく、鼻はかなり写実的に細長の鼻腔もはっきりと表現されている。肩と腰には雲形紋が認められるが、胸から胴にかけては無紋で、この部分については着衣なのかどうか不明である。胴回り自体も細目

である。「シャコちゃん」との相違点として、もうひとつ挙げられるのは、共に「中空」土偶ではあるが、「シャコちゃん」が軽い肉薄の作りであるのに対し、睫毛土偶のほうは、中実ではないかと錯覚するほどにずっしりと重く、肉厚に作られている。粘土の質も多いに関係しているだろう。成形技術だけをみれば「シャコちゃん」に軍配が上がるが、胎土の選択にしても、仕上げの方法にしても、根本的な違いが目立つ。亀ヶ岡式遮光器土偶の多くが「シャコちゃん」同様に重厚な黒い磨きで仕上げられているのに対し、二枚橋のものは土偶も土面も主に明るい薄茶の色で仕上げられ、なかには明茶褐色に焼きあがる土を化粧土のように用いたと思われる土面や小型土偶も見受けられる。図3に示す土面ものもその一つである。

型式的には、この土偶は頭頂部の角状の突起などから、最盛期を過ぎた時期の亀ヶ岡式土偶に位置づけられるようである。例えば宮城県鍛冶沢遺跡出土の中空土偶（仙台市博物館蔵）や西津軽郡森田村床舞出土のもの（国立博物館蔵）がそのように位置づけられてきたが、これらの場合は、「遮光器」は遥かに縮小してむしろ通常の「腫れぼったい顔」として見ることでできる楕円の隆帯で表現され、その隆帯に「睫毛」と思われる短い沈線が施されている。口唇も同様の楕円隆帯刻線入りでしかも目と同等の大きさで表現されるのもこれらの特徴である。図3の土面も、それと共通するところが多い。



図3 土面 (8.9×8.0cm むつ市文化財収蔵庫蔵)

二つの顔と口唇表現の比較から見ると、これらよりも睫毛土偶のほうが「遮光器型土偶」に近いと見ることが出来る。「遮光器」というよ

りはむしろ「大きな腫れ眼」とも受け取りうるから、完形土偶の「睫毛」表現は、その過渡期を示しているのかもしれない。

### 3. 従来の研究に再考を促す土面

二枚橋（2）遺跡から出土した土面は「20個」とされている。図4には「右の眉の一部」と



図4 二枚橋（2）遺跡出土の土面群（むつ市文化財収蔵庫蔵）

推定される小断片が含まれていないことをお断りしておきたい。また、図中左中段の左右の眼の断片は本来同一固体であると強く推定されるため、合わせて1個とする場合もあるようだ。い



図5 完形の土面 (9.5×11.7cm むつ市文化財収蔵庫蔵)

ずれにしても、これらは「二枚橋（2）遺跡の資料は縄文時代の仮面研究において多くのデータを与えると共に、従来の縄文時代仮面研究に再考を促す、一級の資料であることは間違いない」<sup>1)</sup>と大きな驚きをもって評されている。殊に注目されているのは、出土層位から判断して同じ時代に複数個の土面が用いられていた、と考えられる点である。つまり、これらの土面が何らかの祭祀に用いられていたとして、それはかなり頻繁に執り行われていたのである。晩期の住居跡は検出されていないことから、この遺跡が祭場専用であった可能性も指摘されているという。ただし、中期の竪穴式住居跡は3軒検出されているという。規模はともかく継続的集落の可能性を除外する理由はないと思われる。

これらの土面のうち図4中央の唯一完形のもの、縦9.5cm横11.7cmで全体が球面を成し、鼻の部分がその球面からさらに突起している。裏返すと丸い凹面を成しているが、鼻の部分が削られたり彫られたりはしていない。つまり、形状として小ぶり過ぎるばかりでなく、岩手県葦前遺跡や青森県六ヶ所村の「鼻曲り土面」のように大型で眼が彫り貫かれているわけでもないのが人が顔面に装着して用いるには適さないのである。しかし、上の小さな角状突起の位置に紐穴が貫通しており、どこかに吊るしたり、あるいは装着者の前額部に固定したりすることは十分可能であったろう。表側全体に赤い顔料の跡が残っているから、表情そのものはむしろ穏やかだが、相当に鮮烈な印象を与える赤土面だった、と思われる。

「遮光器」はやや小さめだが眼の合わせ目や上下睫毛の表現には前述の完形土偶に通じるものがある。土偶と土面では当然ながら目的や機能に相違があったと思われるし、鼻や口の表現にも大きな相違が認められるが、睫毛の表現は明らかに共通している。

弘前大学の実測調査報告書によれば、この完形土面のごく近くの地点で見つかった土面が他に5点ある。<sup>2)</sup>5点とも完形土偶と同様の睫毛表現がなされている。これらは舌状台地の南斜面

からの出土だが、反対側の北斜面で見つかった10個についてみると、そもそも睫毛表現のないものが8個、残る2個のうち1個は完形土偶の章の終わりの部分で触れたと同様の、もはや「遮光器」ではない、楕円を描く隆帯による通常の大きさの眼に刻線を押して睫毛かあるいは「二重眼」を表したものである。これにも赤い顔料の跡が残っている。残りのひとつは左眼の剥離した右目だけのもので、完形土面と同様に上部に二個の紐穴が穿たれている。僅かに睫毛の表現が認められる大きな腫れ眼で、眼の合わせ目は幅広で、薄眼を開いているように見える。

このように南斜面と北斜面とで睫毛表現の有無に「10割対2割」というかなりはっきりとした相違があることは、注目してよいかもしれない。睫毛表現のあるものと一重眼表現のものが「別種である」という意識が、そうした扱い方に表れている可能性があるからである。

このことは出土層から見ると、新旧とも関連しているとも考えられ、興味深い。

完形土面（図5）の眼以外の表現で特徴的なのは、完形土偶（図1）に比較してより写実的と言っている鼻と口の表現であろう。完形土偶の極く小さな口が開かれ何言かを発しているのに対し、この土面の唇はやはり開かれてはいるものの、言葉は発せず、上下の歯を覗かせている。土偶でも土面でも歯の表現は極めて稀である。微笑みなのか。あるいは「抜歯はしていない」ことを特に示そうとでもしているのか。類似した口の表現は図4の下段左寄りの「顎髭」（刺青）土面にも見られる。

このような歯の表現の意味や、既に指摘したような「睫毛眼」と「一重眼」の意識的区別の有無、また、これと関連して、隆帯楕円に刻線を巡らせた「腫れ眼」とは区別しながら、二枚橋（2）遺跡におけるような上下睫毛の大きな眼が、東北各地の土偶、土面のなかでどの様な分布状況を示すのかは、興味深いテーマである。二枚橋（2）遺跡の土偶、土面は、このように幾つかの新たな課題をわれわれに突きつけてい

るのである。

#### 4. 珠玉の土偶小品群

始めに触れた完形土偶はもちろん小さな断片も含めると二枚橋（2）遺跡から出土した土偶は157個体を数える。先の土面についての考察でも同様のことが言えるが、このように豊富なサンプル数は、見る者に客体一つ一つの個性を把握するようにと作用する。単体のみでは気づきにくい特徴が、他個体の存在によって見逃しがたいものとなるのである。その意味で、これら数多くの小土偶群は研究者たちにとって文字通りの意味で珠玉の価値を有する、ということができる。ここでは、そのようにして見出された個性のいくつかを挙げ、その特徴について考察する。

##### 4-1 夢に微笑む土偶

図6に示すのは、右手と頭部の一部が欠けた土偶であるが、幸いにして顔表現はほぼ全容が残され観察可能である。小品土偶群の中では比較的大型である。遮光器がないばかりか二枚橋の土偶・土面の一大大特徴である「睫毛」もない。腰や肩幅に比べて際立って大きな頭部は平たく、極端に上を向いている。それは、関東地方のハート型土偶や仮面土偶を思わせるが、上を向く角度の比較では全国でも上位を占めると思われるほどに上向きである。

しかし、その上向き角度がこの土偶の最大の特徴というわけではない。最も注目されるのは、閉じた一重瞼の如何にも優しい微笑である。瞼の半分ほどの大きさで表現された口唇が左側をやや上げて半ば開き、おそらくは「（明るい）エ」の音をか細く発しているように見える。閉じたその眼は明らかに何か喜ばしいものを見ている。観察者は、彼女にだけ見えているその映像の様子を、その瞼と唇の形から想像して見たい気持ちにさせられるであろう。短い手や腕、太くて大きな腰や脚の表現は亀ヶ岡式土偶と共

通する点を残しているものの、この優しさの卓

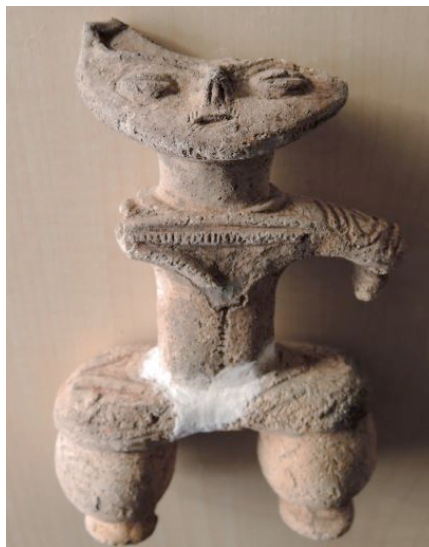


図6 閉じた瞼で微笑む土偶（13.6×8.9cm むつ市文化財収蔵庫蔵）

越した表現は時代や様式を超えて比較しようと思われるほどである。

##### 4-2 授乳を請う土偶

次の図7に示す小土偶は、手の表現から言って、乳飲み子を象ったものと見ることが可能なようである。小さく丸められた口唇は母親に授乳を求めている様子を示している。この場合の

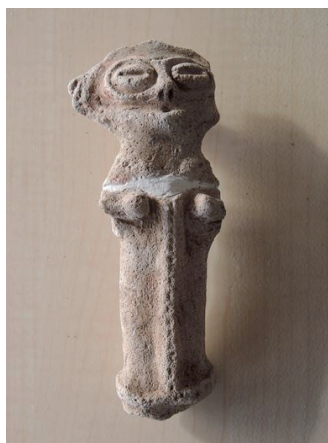


図7 授乳を請う土偶（11.6×4.7cm むつ市文化財収蔵庫蔵）

「遮光器」は、そんな乳幼児のリアルな表現だと受け取るなら、非常に効果的であり、前述の「微笑む土偶」で示されたと同様の極めて巧みな表現力の所産と言うことが出来る。眼差しの方向もはっきりと示されている。

前面にだけ赤い顔料の跡がある。後頭部には把手状の横長の突起が付けられていて、紐で吊るすことができる。乳飲み児を何らかの理由で失った女性が、この小土偶をペンダントのように胸に吊るしている様が目に浮かぶようである。

#### 4.3 仮面を付けた女性像

先に触れた仮面土偶の類には「仮面の女神」（後期、長野県中々原遺跡出土）と呼ばれる有名な土偶がある。逆三角形の「仮面」を装着する女性像である。が、その「女神」は同心円と斜めの並行直線を基調とする幾何学的な模様の衣裳を着け、ひと際どっしりとして非常に威厳に満ちた印象を与えることもあって、その陰部に明確に女性器の象徴といえる文様が印されているにもかかわらず、縄文社会において祭祀の土面は女性が被っていたのだ、という通念を作り出すような機能を果たすには至っていないように思われる。

わたしたちは、恐らくは生得的な感覚から、「仮面の女神」の股間の二重丸のような象徴表現ひとつよりも、乳房表現のない堂々とした体躯の蟹股立像から受ける印象の方に引きずられてしまい、「仮面の女神」という命名にも拘わらず、これを仮面を付けて祭儀の主役を務める縄文文化を象徴する女性像として、なかなか受け入れられないでいるのかもしれない。

しかし、図8、9に示す二枚橋（2）遺跡の仮面を付けた土偶は、土偶としては珍しく自然な膨らみで造形された両乳房によって、女性であることが明確に示されている。おそらくは靈力や神秘の威厳に満ちた女性というよりは、平生において生き生きとした魅力を発揮する一般的な女性の一人でもあったであろう女性が、祭祀に際してはこうして面を着装した、ということを実に雄弁に物語ってくれている。単なる象徴



図8 仮面を付けた女性（7.5×8.2 むつ市文化財収蔵庫蔵）



図9 同上（右側面からの撮影、同上）

としての表現ではない、丁度、同時期の彼らがイノシシやキノコの造形に示した素朴ながら極めて卓越した写実性が、この女性像には見られる。それが、縄文社会の実相についての理解を助けてくれるのである。

## 5. 源流としての縄文社会

縄文人とわれわれ現代日本人との関係については既に拙論『モノとしての縄文土器類』においても触れたように「縄文諸族」という概念を持つことなく、「日本人はどこから来た？」といった「単一民族単一起源」説を前提にしたような議論は全く無益である。<sup>3)</sup> そのことを明確に示したのが、一連のDNA解析によるルーツ研究である。ここでは繰り返さないが、にもかかわらず現代日本人の多くが抱く縄文文化に対する一種の「違和感」のようなものは相変わらず根強いように感じられる。

以下に紹介する民俗学者宮本常一の伝えるある老婆の回想は、現代のわれわれが縄文人としっかり結びついていることを実感させてくれる。

もう十五、六年前のことであるが、高知県の山中で一人の老婆から、その人の若いときの話を聞いたことがある。イロリの火の燃えるそばで、老婆の話を聞いていて、しばしばノートの手が止まって、胸が詰まる思いがしたのである。その老婆は子を間引いた話をしてくれた。長男はあるのに次々と子供が生まれる。今日のように避妊の方法もないから、つい妊娠してしまう。なけなしの財産の中で多くの子供を抱えてはやってゆけないし、子供たちが苦勞するので、やむなく生まれる子を処分したのである。「子供たちはみんなこの床の下に埋めてあります。わたしはその上に毎晩寝ています。わたしは極樂へ行こうとは思いません。地獄でたくさんです。あの世でどんな苦勞をしてもいい。早く死んだ子供たちと一緒に賽の河原で石を積もうと思います」としみじみ話してくれた。

過去の日本の女のなかには、こうした苦勞を背負って生涯を歩いた人たちがどんなに多いことだったろう。こういう過去の生活はいろいろ批判され、改めなければならなかったが、女たちはそうした世界の中で、それなりの善意と誠意の中に生きていたのであり、彼女たちにとってはその当時、それが最善の方法だったのである。<sup>4)</sup>

青森県天間林村のニッ森貝塚からは、縄文中期の蓋付小型甕棺墓が出土している。幼児用の埋葬設備である。甕棺墓は黄河文明に発するらしく中国大陸各地にも広がっている。日本では弥生時代になって西日本で盛んにこの埋葬法が行われた。しかし、東北地方では中国大陸とほぼ同時期に広まりを見せる。縄文後期中葉とされる盛岡市周辺の「伏甕」の流行もその流れの一環であったに違いない。甕棺は幼児の遺骨容器として用いられたらしいが、人骨そのものが検出されることはまれであり、胎盤入れだった、

という説も一定の説得力を持つ。しかし、住居内の床下に埋められていたものとして検出される例が多く、縄文の人々の、特に女性ゆえの悲しみと祈りの結果としてみるなら、甕棺墓の習俗は宮本常一の現代についての報告ともほぼそのまま重なり合うと判断されうるだろう。しかも、底を破壊した甕に収納したうえで、土中に完全には埋め込んでしまわずに、住居内の空間とつながる僅かばかりの通路が保持されている例、家人が頻繁に行き違う出入り口の床土下に埋められた例があるという。死産や産後間もない乳呑児の死も、現代とは比較できない確率で生じたと想像されるから、また、「間引き」の要因も常にいろいろな形で襲ってきたであろうから、甕棺墓や伏甕、あるいは前章で示唆したようなペンダント型土偶が、なければならなかったのではないか。それはごく最近まで、日本列島の各地でいろいろな形で残っていた習俗に、そのまま結びつきもするのである。

日本列島のかつてからの住民である縄文諸族は、われわれの直接の祖先である。このことは国立民俗博物館をはじめ、青森県立郷土館などでも明確に宣言しているところであり、むしろ一般の認識の方が遅れている。

一万数千年におよぶ日本列島縄文期の人々の流動の歴史は、当然ながらその間に生きた人々の「波瀾万丈」の集積である。

## 6. 土偶・土面についてその他のこと

### 6-1 ヘンツェの土面論

カール・ヘンツェは『新しい皮膚による再生祭式』の中で、死者の再生祈願のために、犠牲となった人の生皮を剥いで神官が身に纏う、カニバリズムを含む中米の葬送儀式的例を挙げ、日本の縄文時代の「土面」にそうした「再生祭式」に関連した表現が認められることを指摘した。16世紀に至るまでアステカ帝国で執り行われていた、農耕の豊穰を祈願し感謝する、しかし、極めて残酷で人身供犠とカニバリズムを伴

う一連の祭祀に関して、秋田県麻生遺跡出土の縄文晩期の円い土面（図10）の表現にそれとの関連性が指摘されたのである。<sup>5)</sup> 越川洋一によれば、アステカの祭式の一つでは一人の女性が犠牲に供される。

トシ=テテオインナン役の女は盛装して神殿に連れてこられ、彼女はここで女呪医たちの手によって首をはねられ、すばやく皮を剥ぎ取られる。この生皮は、一人の力強く背が高い男の神官に着せられるのである。<sup>6)</sup>

トシ=テテオインナンは穀物の神であり、神官が犠牲になった女性の新しい生皮を身に纏うことによってその「再生」が象徴的に示される。これに連なる、やはり「豊穰」「再生」のためのシペ・トテック神の祭礼では、捕虜の男、女、子供が犠牲に供され、同じように生皮が剥かれ、それを纏った祭官たちの舞踏が行われ、カニバリズムも行われる。ヘンツェは、秋田県麻生遺跡の円形土面が、この生皮を被ったシペ・トテック神を具象化した顔面表現に酷似していると指摘したのである。

奇妙に閉じた両眼ばかりでなく、二重に縁取られた口の部分の溝も印象深い。外側と内側に二重に両唇があるかのような印象を受ける。…[中略]…内側の唇は外側の唇によって囲まれている。これを前から見ると内側の両唇は閉じ、その反対に外側の両唇は広く開き小さな卵のように内側の唇を囲んでいるように見える。横顔から見ると内側の両唇の膨らみはさらに少し前へ突き出ており、自然な形状をそのまま伝えている。<sup>7)</sup>

つまり、この土面が単なる一重の仮面ではなく、剥した皮をそのまま被った時の祭官の顔の状態を表現した面だというのである。祭官は、生贄から剥ぎ取った頭顔皮をマスクとして被る。マスクは眼と鼻と口の部分が開いていてその部分にだけ祭官自身の目、鼻、口がのぞいている。

「皮膚を被る頭は神を現す祭官の頭である必要はない。死者の頭の場合もあっただろう。…[中略]…もちろん<新しい皮膚>は新生の象徴であ



図10 麻生遺跡出土円形土面（高16.4cm 東京大学総合研究博物館所蔵）

る」<sup>8)</sup>として、ヘンツェはプエルトリコ、ニューギニア、中国など環太平洋地域における「新しい皮膚による再生」儀礼の例を列挙する。

麻生遺跡の土面の形状を改めて見るなら、ヘンツェの指摘は決して的外れではない。それは明らかにマスクマンの面として造られたものであろう。ただし、ヘンツェは「この先史時代の素焼きによる人面は本来日本のものではない」<sup>9)</sup>という前提に立っており、日本の縄文時代における生贄を伴う宗教的祭祀の可能性には言及していない。もとより、日本の縄文時代晩期が、16世紀のアステカ帝国と同レベルの農耕文明社会であったと考えることはできないところである。但し、「伝統的な古代文化の観念では、骸骨すなわち頭蓋骨もく完全に死せるもの」とは感受されず、むしろそこから能力や力が湧き出るものと考えられた。それらの能力や力は再び活性化され、はっきりと示されるのである。死のお供となる人間の生贄、あるいはむしろ頭蓋骨儀礼と結びついた祖先儀礼はこういった考えに深く関連している」<sup>10)</sup>との指摘は、傾聴に値する。



二枚橋（2）遺跡出土の20枚に及ぶ土面で、麻生遺跡のものに似た印象を受けるものとしては、既に「3. 従来の研究に再考を促す土面」で取り扱った完形の土面（図5）が第一に挙げられる。唇の表現が「二重」と受け取り得るからである。同じ表現は図4中の左下の土面にも認められる。しかし、脛を取り巻く線は麻生土面のように際立っておらず、鼻の先の表現も麻生土面のように鼻穴を含む突先だけがマスクから出ていることを示す横線が見られないなど、似た表現があるもののマスク土面であると判断することには無理があるようだ。

しかし、岩手県萩内遺跡の大型土偶頭部が示すように獣皮を被せたり被ったりする習俗はあった。また、獣の皮を剥ぎ取って被服として纏う、ということはむしろ日常的なこととして行われていたはずである。生贄を伴う祭礼の可能性を縄文時代あるいは弥生時代の日本列島から排除して考える必然性もない。副葬品として死者と共に埋められた土偶の存在は、そのようなことがあった可能性を示唆しているのかもしれない。中国や南西太平洋の少数民族の間には、生贄を伴う祭礼が最近まで残っていた例もある。

また、新大陸に渡った人々は、もともとは東南アジアから大陸沿岸沿いに北上した人々である。その途上の日本列島に留まることになった最初期の縄文人を残して、彼らは、ついには、遅くとも1万5千年前には北米に達していたと考えられている。彼らは私たちとルーツを同じくしているのである。したがって、米大陸先住民の習俗の一部が日本列島の縄文のそれに類似していても特に不思議ではないのである。

## 6-2 土偶の足と中国少数民族の葬儀

土面と同様に、最初の章で考察した「睫毛の土偶」も含め、縄文文化の土偶がそもそもどのような意味を持ちどのように用いられたのか、という性急なしかしながら正当でもある問いに期待通りの回答を行うことは至難であるどころかほとんど不可能と言わなければならない。われわれはそれについては何も知らないに等し

い。〈祭祀〉という常套句は、その不可能性の別の表現であるとさえ言えそうである。

但し、「壊される土偶」という概念は、「祭祀」よりは踏み込んだ意味を持つ。例えば「片足」の欠けた土偶に出会うことは多く、そこに何らかの目的意識を探ることができそうに感じられるからである。二枚橋（2）遺跡の出土品でも、どの胴体にも接合しない「脚」や「足」は相当数に及ぶようだ。

以下に示すのは、中国少数民族研究から日本古代史の謎に取り組んでいる工藤隆による、雲南省ヌ一族の葬送儀礼についての取材記録である。伝統社会における「死霊」への恐れが「足」に関連する例として興味深い。

死体が入った棺を村のはずれの墓地まで運び、棺の前に豚の頭と足、酒、米を供える。さらに、真ん中に切り込みを入れてある「金竹」（現地産の竹）を棺に差し込んで、土のなかまで届かせる。続いて、参列者の一人が、わざとその竹を切り込みの部分で割り、次のように言う。

「あなたは人間界のことは考えないで、向こうの世界に行ってください。私の足は折れてしまいましたので、私は送って行けません。どうか、一人で行ってください」<sup>11)</sup>

愛しく尊い人であればあるほどその死に直面した近親者たちの悲しみは深い。だが、その一方で、深い悲しみから生じる災いの忌々しさにも看過しがたいものがある。「殉死」の類はその最悪の例であったらう。したがって、人々は「死霊」を恐れ、「足が折れたので一緒に行くことは出来ない」といった内容の葬送歌を歌い、愛しい者に最期の別れを告げるのである。

土偶の副葬品としての出土例は、夥しい土偶発掘数に比すればそれほど多くないようである。しかし、足を失った土偶の例はかなり目立つ。二枚橋（2）遺跡の出土例については既に触れたが、東村山市の下宅部遺跡では頭部や胴部の出土数には到底見合わないほど多量の「足」ばか

りが出土している。それは縄文人たちの死への  
悲しみと畏れの「断ち切り方」のひとつの表現  
であったかもしれない。

## 7. 結びに代えて

ひとつ またひとつと 姿態を手に取り  
回して見るとき  
なにゆえに それらが消え去らずにいたのか  
おおよそは 理解することができる  
だが 私たちが 過去のことに  
もっと深く もっと真摯に 関わるならば  
私たちの微笑みは おそらくは  
1年前よりも 澄みきったものとなるだろ<sup>12)</sup>  
ライナー・マリーア・リルケ『タナグラ人形』(1907)より

## 謝 辞

二枚橋(2)遺跡出土品の写真撮影等にご理解ご協  
力を頂いたむつ市、大畑町の関係者各位に感謝いたし  
ます。また、東京大学総合研究博物館による写真資料  
の提供、東京国立博物館のご高配に感謝いたします。

## 注 解

- 1) 「仮面の考古学」大阪府立弥生市文化博物館  
2010年 S.63
- 2) 「亀ヶ岡文化遺物実測集」弘前大学文学部日本考古  
学研究室 2006年 S.109
- 3) 「モノとしての縄文土器類」水沼和夫、八戸工業大

- 学異分野融合科学研究所紀要 第7巻 2009年 39ff.
- 4) 「庶民の発見」山本常一、講談社学術文庫 2013年  
S.60f.
- 5) 「新しい皮膚による再生祭式」カール・ヘンツェ  
(「縄文図像学」言叢社 1989年 所収) S.12
- 6) 「アステカ帝国における人身供犠」越川洋一 (同  
上) S.82
- 7) 同上 S.14
- 8) 同上 S.18
- 9) 同上 S.11
- 10) 同上 S.18
- 11) 「中国少数民族と日本文化」工藤隆、勉誠出  
2002年 S.222f.
- 12) Rilke, Rainer Maria, Sämtliche Werke, I-VI,  
Frankfurt/M. 1992, I-S.515f.

## その他の主な参考文献

1. 「日本の美術」NO.527(「土偶とその周辺」)2010年  
至文堂
2. 「日本人になった祖先たち」篠田謙一 NHK ブック  
ス 2007年
3. 「土偶・コスモス」MIHO MUSEUM 編 羽鳥書店
4. 「東京国立博物館図版目録 縄文遺物編(土偶・土  
製品)」中央公論美術出版 1996年
5. 「東京大学総合研究博物館所蔵 縄文時代土偶・そ  
の他土製品カタログ 改訂版」磯前純一・赤澤威  
言叢社 1996年

## 要 旨

二枚橋(2)遺跡は青森県下北半島の北側沿岸に位置する縄文時代晩期後葉の遺跡であ  
る。ここからは縄文土器類、石刀、土偶、土面、その他の縄文期の遺物が豊富に出土して  
いる。そのうちの1308件が2013年秋に文部科学省より国の重要文化財としての指定を受  
けている。この研究ノートは二枚橋(2)遺跡出土の品のうち、土偶と土面のいくつかに  
ついて特徴的と思われる点を指摘するとともにわれわれ今日の日本人と縄文期の精神生活  
の繋がりについての考察を記したものである。

キーワード:縄文文化, 土偶, 土面, 亀ヶ岡式, 遮光器, 二枚橋